## 巻頭コラム

# 変革する偕行社の年頭にあたって

会長　志摩　篤

輝かしい年の初めに当たり、偕行社会員の皆様には本年が素晴らしい一年となりますよう、心からお祈り申し上げます。

偕行社は長年の念願だった陸自元幹部の会との組織的な合同をいよいよ本格的に始めました。と同時にスリム化のために、社屋の移転や人員の削減をも断行しました。同時に陸自側は昨年、全ての陸自幹部退官者を会員とする「陸修会」を立上げ、偕行社との合同の準備を整えました。偕行社と陸修会の合同の時期を令和6年の春と予定しております。従いまして本年は両組織にとり重要かつ有意義な年となります。来る1月17日の全国会長会同におきまして、理事長から合同の為の今迄の経緯と今後の予定が発表される事となりましょう。各地偕行会の協力なくしては、この大事業を推進することはできません。各地偕行会の会長の支援が切に求められます。

陸自会員にとりましても、従前会員（陸軍出身会員）にとりましても、これからの1年は戸惑いの多い年となりましょう。特に陸修会は初めて生まれた組織の為、小異を捨てて大同につく心構えが求められます。

私事で恐縮ですが、私は15年程前、元会長の山本卓眞さん（陸士58期）から招かれ偕行社に入りました。同期の深山氏や大東氏は既に活躍していましたが、周りは殆ど従前会員でありました。山本さんは後を託すのは元自しかいないと言う強い使命感の方でした。しかし当時は、現役で作っている陸自幹部の会である修親会がある事を知っている理事は余りおられなく、兎にも角にも「引き継いで貰いたい」のひと言でありました。そういう私自身も逆に偕行社をよく知っていませんでした。入会したころか、不用意に「偕行修親会とか修親偕行会にすればいい」と口走り、先輩理事に偕行社を壊しに来たのかと誤解をされました。偕行社を引き継ぐには修親会にも限界がありました。

合同する組織の名前を如何にするかと言うことです。関係者の努力に関わらず、陸上自衛隊の中で偕行社の認知度は、正直まだ十分ではありません。一方、陸修会の名も誕生して1年も経っていませんから、認知度云々の話ではありません。しかし合同を目指してつくった会ですから「陸修」の文字が入らなければならない。「偕行」の言葉を入れなければ、今後靖國神社の門をくぐれない。

さてさて、聡明な諸兄諸姉どうしますか。